

ビジターへの学習活動の支援について

～インタープリテーションの意義～

鈴木 有紀

愛媛県総合科学博物館 学芸課

〒792 愛媛県新居浜市大生院2133番地の2

はじめに

学校教育における、新しい指導要領では、生涯学習社会をふまえ、個性を重視し、社会の変化に対応できる能力、自己教育力の育成を目指す教育がうたわれている。

これにともない、従来の知識、理解を中心とした学力観から意欲、興味、関心、決断力等の新しい学力観が重視され上位に位置づけられるようになった。これらは学習者である児童、生徒の主体的な、あるいは能動的な取り組みを重視するものである。そして博物館は生涯学習機関のひとつであることからすると、このような新しい学力観に対応して、ビジターである児童生徒等学習者に対する学習活動支援のあり方を見直す必要があると思われる。しかし、この見直しは、従来の解説文、パネル等の変更などではなく、ビジターの主体的な学習活動を促すものでなければならない。

このことに関しては、次にも述べられている。

「博物館学習というと、今までは、展示してある資料を見学したり博物館側で準備したカリキュラムにより説明を受けたり、体験学習をしたりするというとらえ方が多かった。このような学習は「博物館」という資料の整った場で体験的に学習できるという点で大変価値のあることであった。しかし、児童は、与えられたプログラムにそって学習している場合が多く、「主体的」に活動しているかという観点からみると、多少の疑問が残った。これからは、博物館を単に見学や体験の場としてとらえるのではなく、自分の課題を解決するための学習の場としてとらえ、児童が目的に応じて主体的に活用して行けるようにすることが大切ではないだろうか。そして、そのことが将来に於いて様々な課題を解決して行くときに「生きて働く力」と成り得るのではないだろうか」(岡田ほか、1995)。

先にも述べたが博物館は、子どもから高齢者まで、人生のあらゆる時期のあらゆる人のためのものであり、そういった様々な人々の主体的な学習活動を支えていかなければならない。では、いったい主体的な学習活動を促す支援のあり方としてはどのようなものがあるのか。

「体を通して学ぶことの大切さ」を基本理念とするアメリカの「ボストン子どもの博物館」では、ビジターが展示に触ったり遊んだり体験することで何かに興味を持ち、学ぼうとするきっかけを作ることを仕事とする、「インタープリター」と呼ばれるスタッフが配置されている。そしてこのインタープリターは、単なる展示解説にとどまらない、学習活動への支援を行っている。

ここでは、そのビジターへの学習活動の支援のひとつとしてのインタープリテーション活動の意義について述べることにする。

インタープリテーションとは

1. 歴史と理念

インタープリテーション（Interpretation）とは、一般に「通訳」「説明」を意味するものであるが、その歴史は19世紀末、イーノス・ミルズを創始者とするアメリカのネイチャーガイド達の自然に対する解説活動が始まりである。

インタープリテーション活動の要素の一つとして、あることに対して、人々に知識や情報を教えるのではなく、興味を刺激し啓発していくということがあげられる。創始者であるミルズは、人々に自然についてのインタープリテーション活動を行いながら、その原則ガイドライン、技術や手法を体系化し、基礎を築いていった。後にこのインタープリテーション活動は紆余曲折の道をたどるが、1950年代半ばに、フリーマン・チルデンによって、ミルズが唱えた基礎に立ち戻り、現在の形に完成されていった。

先にも述べたがインタープリテーションの活動は主に自然解説活動のあり方を求めて始まったものである。しかしその理念はその他の分野においても参考となり、取り入れ学ぶべき点が多い。

以下に、インタープリテーション活動の基本となる定義と理念、及びインタープリテーションの原則について記す。

(1) インタープリテーションの定義

単に事実や情報を伝えるというよりは、直接体験や教材を活用して、事物や事象の背後にある意味や相互の関係を解き明かすことを目的とする教育活動である。

(2) インタープリテーションの理念

- ① インタープリテーションはあらゆる事実の背後に存在するより大きな真実を解き明かすものである。
- ② インタープリテーションは、誰もが持っているちょっとした好奇心を最大限に利用して、ビジターの知的・精神的な向上をうながすようなものである。

(3) インタープリテーションの6つの原則

- ① インタープリテーションは、ビジターの個性や経験と関連づけて行われなければならない。
- ② インタープリテーションは、単に知識や情報を伝達することではない。
インタープリテーションは、啓発であり、知識や情報の伝達を基礎にしているが両者はイコールではない。しかし、知識や情報の伝達を伴わないインタープリテーションはない。
- ③ インタープリテーションは、素材が科学、歴史、建築、その他何の分野のものであれ、いろいろな技能を組み合わせた総合技能である。技能であるからには人に教えることができる。
- ④ インタープリテーションの主眼は、教えることではなく、興味を刺激し、啓発することである。
- ⑤ インタープリテーションは、事物事象の一部ではなく全体像を見せるようにするべき

であり、相手の一部だけでなく、全人格に訴えるようにしなければならない。

- ⑥12才ぐらいまでの子どもに対するインタープリテーションは、大人を対象にしたものを薄めて易しくするのではなく、根本的に異なったアプローチをするべきである。最大の効果を上げるには別のプログラムが必要である。

(日本環境教育フォーラム, 1994)

2. 博物館学習における意義

(生涯学習社会における博物館活動のあり方とインタープリテーションの役割)

博物館にとって資料の収集、調査、保存を行い、それを教育的配慮のもとに展示・教育活動を行っていくことは博物館の使命である。しかしこれまでの博物館活動はその展示手法をとりあげてみても、観る側の興味や関心、発達段階についてを考えて、つくられたものは少なく、どちらかといえば資料中心の、博物館からビジターへの一方通行的な展示が多いように思われた。しかし近年の体験学習の必要性の高まりとともに、最近では多くの博物館において、参加型体験展示、触れることのできる展示、学校では行わない実験等の展示手法やカリキュラムの工夫がなされ、ビジターへの配慮が見られる。当館においてもそれらは、効果をあげていると思われる。しかし、やはり多くのビジターが館側の準備した展示、プログラムに沿って行動している観があり、時として「教えこみ」となり、ややもすると相互作用の少ない学習活動になっている。自己教育力とは主体的、自発的に意欲

関心を持って取り組むことから生まれる(図1)。その意欲、関心、探究心を啓発すること、きっかけを与えることが「支援」であり、「教え込み」ではない。そして、「支援」は一律ではなく人それぞれに(対象により)やり方が異なるが、共通するものもあるはずである。

インタープリテーションの活動は、博物館を訪れるビジターに対して、その豊富な資料をもとに、学習意欲を刺激し、啓発

していく「支援」のひとつとして意義があると思われる。そして、インタープリテーションを取り入れ、支援を行っていくということは同時に人々が博物館に何を求めているのかを知ることでもあり、それが新しい展示手法の開発等、博物館活動のあり方を評価・検討していく上でも重要である。

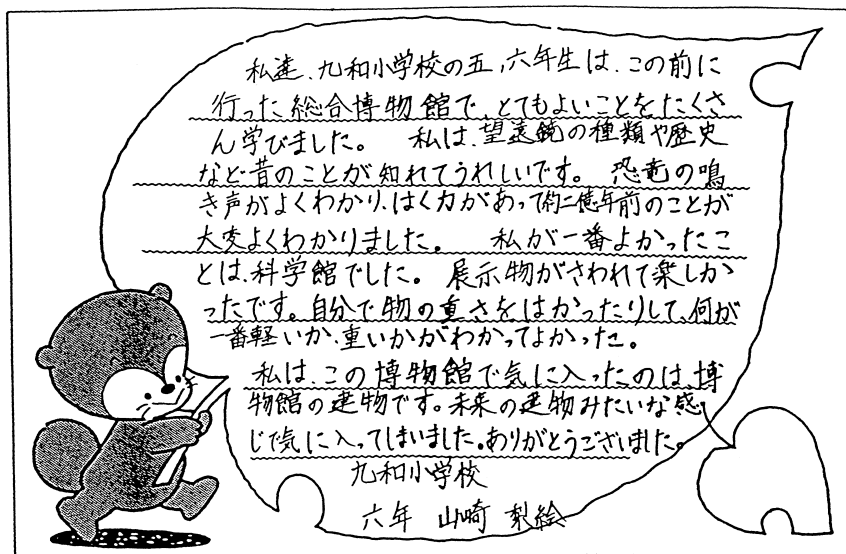


図1 「自分でやってみて、わかってよかった」

—来館した児童の感想文—

インタープリテーションの試みと反応

当館，産業館伝統産業実演展示コーナー「伊予かすりの機織り」（写真1，2）を中心に社会見学の授業で訪れた小学校5年生と6年生（14名）に支援の工夫を試み，検討した．

1. インタープリテーションの過程

(1)興味・関心を高める（機織りに興味を持たせ，「自分でやってみる」きっかけを作る）

最初は，学芸員または展示案内員が機織りを実践して見せ，「いっしょにやってみよう」と参加を促した．その際「たぬきの糸車」等，機織りに関連する童話を話して聞かせ興味を持たせた．童話等では聞いているが実際に織るのは初めての子どもが多く，最初は少しの助言を行い，あとは子ども自身にまかせることとした．恐る恐るという感じで織り始めるが，最後にはどんどん自分で織り進むようになった．

(2)生活とのかかわりに関連づける

現在の生活とのかかわりについて，身近かに感じられるよう努めた．実際に着ている服等と関連づけて，布の織り方について話したり，伊予かすりの反物，製品等実物資料に触れる等の工夫を行った．機織りは昔の出来事だと思っていた子ども達にも「夏に着る浴衣もこうやって作っているのかなあ」「最初はただの糸なのに，縦と横でどうして糸が離れないの」等，「織る」ことへの興味や理解の深まりが感じられた．

(3)産業への認識を深める

機織りを通して伊予かすりの製造工程について，ポイントを押さえた簡単な説明を行った後，伊予かすりの歴史と製造工程について，よりわかりやすいイメージを持たせるためすぐ近くに展示してある映像資料を用



写真1 「できるだろうか」機織りに取り組む子ども

いた．その際，映像を見終えるまでは，こちらから言葉をかけず，その後，自由に感想や質問を受けた．ひととおり見終わった後も，もう一度見直す子どもが見られた．また，最初は機織りにためらっていた子どもも，改めて挑戦している姿が見られた．

2. 考察

(1)では，先の原則の④に該当するものとして，機織りに対する動機づけを行い，また原則①について機織りに関連する童話を話して聞かせ，興味・関心を高めた．(2)，(3)では原則②について，布の織り方や伊予かすりの製造工程の映像資料等の知識を基礎として支援を行い，生活との関連や，産業への認識を深めた．

「伊予かすりの機織り」ではポイントを「織る」技術において，学習支援を行ったが，その歴史に興味を覚える子ども，製造工程そのものにも興味を覚える子どもと，やはりそれぞれに違いが見られ，短時間でしかも1回だけの学習では，学芸員一人で全ての子どもへ

の支援には無理が生じた。しかし子どもの中には、以前に家族で訪れ経験している子もおり、子どもどうしでお互いに助け合っている姿も見られ、学芸員もそれに助けられ、改めてリピーターの大切さを痛感した。支援を行う際に、こちら側の出番をできるだけ少なくして、子どもに少しでもいいから考える時間を取り入れ、明るくゆっくりはつきりと、体全体を使った語り



写真2 展示案内員により機織りの助言風景

方を意識し、わかりやすい言葉で伝えることを心がけたが、子ども達も応えてくれたように思う。また、その子どもの「いいところ」はどんどんほめるようにした。

今回の支援は小学校高学年の児童を対象に行ったが、博物館を訪れるビジターの年齢構成や目的は様々であり、また、予備知識の違いもあり、それにともない支援の方法も違ってくる。今後は、活動を通しながら補助教材の開発や対象物の詳しい調査等、支援の方法についての検討を行いたい。

今後の課題

最近、「体験学習」として、多くの博物館で参加型の展示や動く展示等、新しい工夫が見られ、子ども達の人気を集めているが、インタープリテーション活動を行うことによって、ビジターが主体的に学習意欲を持ち、それぞれの課題を解決していくのも、また体験学習である（写真3）。

これまでに述べてきたように、インタープリテーション活動には、これからの博物館活動に活かしていきたい視点がたくさん見られる。しかし、方法だけをまねてマニュアル化を行ってもうまくはいかない。今後は学校教育と連携、協力した実践研究等、その理念をしっかりと踏まえた活動の積み重ねが必要であり、また、具体的な事例の検討を中心に、博物館における



写真3 展示室内での学習風景
「わかってしていること」はそれぞれ違う

ビジターへの新しい学習支援のあり方について研究しなければならない。

生涯学習の時代において人々が博物館に何を求めているのかを知り、新しい博物館づくりを行っていくためにも展示内容に対応したインタープリテーション活動のあり方を具体的に探っていきたいと思う。

参考文献

- 岡田仁一・関根和江・杉本昌世・星悦子（1995）子供達が主体的に取り組む博物館学習を目指して・「小学校3年生の郷土学習」実践事例．戸田市立郷土博物館研究紀要.10, 97-113
- 国立科学博物館（1996）教育ボランティア活動10年のあゆみ，国立科学博物館．東京.63p.
- 諸澤正道編（1991）開かれた博物館をめざして，財団法人科学博物館後援会．東京．373p.
- 佐伯 胖（1995a）「学ぶ」ということの意味・子どもと教育．岩波書店．東京．215p.
- 佐伯 胖（1995a）「わかる」ということの意味〔新版〕・子どもと教育．岩波書店．東京．217p.
- 染川香澄（1994）こどものための博物館・世界の事例を見る．岩波ブックレットNo. 362, 岩波書店，東京．63p.
- 高橋専明（1980）理解思考学習と問題解決学習－教育の方法を考える－．日本初等理科教育研究会紀要．38, 88-98
- 日本環境教育フォーラム監訳（1994）インタープリテーション入門・自然解説技術ハンドブック．小学館．東京．208p.
- 文部省（1993）小学校生活指導資料・新しい学力観に立つ生活科の学習指導の創造100-103